

赤花とあるせしものは實のれるよしなれど、花若金黃、一葉一蕊、生甚延蔓とも、金碗喜木ともいへるかたは、實を結ぶさたなし、さて棣棠に三種ありて、一種白赤花開て子をむすぶものは、中國にたえてきこえず、金黃花といへるは、これすなはち八重山吹金碗喜木は一重山吹になんありけるか、れば山吹に實なれるは、いとくめづらかなること、いふべし、因にいふ、和漢朗詠欵冬の詩に、清慎公の點著雌黃天有意欵冬誤綻暮春風と作られしを、集註二の卷にたすけて解たれど、こは和名抄草類部にも、欵冬一名虎鬚、和名夜末不々木、一云夜末布木、萬葉集云山吹花など混雜てあるして、そのころ訓のおなじきがゆゑに、おもひひがめし也、これよりや、ふるき本草倭名には、欵冬を九の卷草部中に、和名也末布々岐、一名於保波オホバとて出し、新撰字鏡には桩の字を、木部に山不支サンブシと訓て載たり、萬葉集にも假名に書き、または山吹山振なども書たれど、欵冬と書るは一所もなし、さればいとあがれる世には、草屬の欵冬を木屬の棣棠とは字をあやまらざりし也、亦按に欵冬は也末不々木と五言にいひ、棣棠は山不支と四言にいふべき例也、ふ々きといへる語意は、已に余興高田が著せし棣梁集の自注に釋たれば、こ、よせけり、

〔常山紀談一〕太田左衛門大夫持資は、上杉宣政の長臣也、鷹狩に出て雨に遭、ある小屋に入て蓑をからんといふに、わがき女の何とも物をばいはずして、山ぶきの花一枝折て出しければ、花を求るに非すとて、怒て歸りしに、是を聞し人の、それは七重八重花はさけどもやまぶきのみのびとつだになきぞ悲しきといふ古歌のこゝろなるべしといふ、持資おどろきて、それより歌に志をよせけり、

〔武江產物志 遊觀〕棣棠花 金性寺押上俗ニ山吹寺といふ

蒲田新梅屋敷中ノ散

〔剪花翁傳 前編二〕三月開花八重山吹 花の色黃葩一重山吹より少少さし、開化三月上旬、方東南向三分陰、